

カリキュラムの進め方にも疑問

山田： それとは別に、今の義務教育のすすめ方にも問題があるんじゃないですか。

石井： 私はね、歴史なんかだって、あまりむずかしいことをやりすぎると思います。私は小学校の歴史は(今は社会科と言うんですが)英雄か何か、人々の手本になるような人物を教えるだけでいいと思うのです。そして大きくなってから、そういう人間が活躍した世の中というものは一体どういうものだったか、ということで、学習させればよいと思うんです。初めっから、弥生式時代がどうのこうのなんていうむずかしいことを、小学生のうちからやる必要はちっともないと思うんです。

私が、東ドイツの小学校教育がすばらしいと思うのは一、二、三年の三年間は社会科も理科もないということです。徹底して読み書きをやるんです。読み書きの力を養えば、その力を必ず活用したいという時期が、そのあとに来るんです。その時に理科や社会科をやらせれば、理科でも社会科でも、興味をもってやることのできるわけですよ。一、二年生のうちから、社会科だ、理科だといったって、満足に読む力がない時に、そんなものを興味を

もってやれるはずがない。私は読み書きの力をしっかりつけると言いたいんです。

例えば、東ドイツでは二十四時間のうち十四時間までが国語です。これは、四十分授業にすると、毎旦二時間ないし四時間、国語学習をしていることになります。日本では一日に一時間、多い日に二時間あるだけです。ところが東ドイツでは三時間から四時間が国語、そのほかの教科は一時間か、多くても二時間しかないのです。

山田： 日本では、算数、社会、理科、とつめ込みをするが、親がほんとうに覚えさせたいのは字なんですよ。ところが覚えさすという順序が間違っている。まず、ひらがな、カタカナから始める。胸や名札に名前をつけるものも、ひらがな、カタカナで、漢字じゃないんです。そういうふうになっているから結局、自分の名もなかなか書けないようになってしまうんですね。

石井： 名札だって、漢字にしますと子供はたちまち覚えちゃうんですよ。われわれだって、かなばかりで書かれている名札はなかなか読めないものです。チラッとみただけでは、とてもだれ君だかわからない。漢字ですと一文字か二文字ですからね。一目でパッとわかる。これは、幼稚園のどこでもあることなんです。漢

字教育をやっている幼稚園では、みんな漢字で名札を書かせているんですよ。ところがそうしなさいと言うと、先生の方はたいてい反対する。そんなことを言って園長先生、子供たちに読めるはずがありません。そうしたら困るのは私たちです」。たいてい先生方はそう言って反対するそうです。

それで、ある幼稚園では、園長さんが「そう思う人は、かなで書いても結構です、私の言うことを信じる先生だけ、漢字で書いてください」と言ったそうです。そうすると、名札を漢字で書いた組の方は、一日でみんな覚えてしまってまったく混乱がない。ところがかなで書いた方の組は一週間たっても相変わらずゴチャゴチャ。それで今まで漢字の名札に反対していた先生も「園長先生、間違っていました。私も漢字にさしてもらいます」と言ってきたそうです。

私が学校で一番さきにやったときは、一年生の下駄箱は全部かな書きにするのが当然だというような習慣がありますから、私のとこだけ漢字にしてはいけないと思って、かなで書きました。そうすると毎日、子供が「ぼくの靴がない」と言うてくる。靴がないんじゃない、ちゃんとその子の名前のところに入っているわけなんです、自分の所がわからないわけですよ。

それで、ぼくの靴がなくなったと言うので、その子のゲタ箱を捜すのですが、かな書きのその子の名前を捜すのが骨がおれるんです。あのころは五十人から五十五人いましたからね。これをつぎつぎと見ていくというのは、とても大変なんです。かなで書いてあると、みんな同じに見えて、非常に見付け出しにくい。漢字で書いてあれば、パッと一目でわかるんです。それは幼児でも先生でもまったく同じことなんです。かなで書いてあったら、だれの名前でも読めますが、読めるから必要のない他人の名前まで、一つ一つていねいに読んでいく。だから、大変な時間がかかります。ところが漢字にしますと本当に簡単です。漢字ですと、かなで同じものでも異なった字になりますから、自分の名前が、たくさん名前の中からパッと目に飛びこんでくるんです。だから活字の中から自分の名前を捜し出すということは、漢字で書いてあれば実に簡単にできますでしょう。

ところが、それがなかなかわかってもらえないんです。特殊学級の先生には、私はかなり褒めたんです。またいろんな本にも書いているんですが、なかなか納得してもらえないですね。